



### 「雑記」 ～かけがえのない存在～

以下は、冊子「両親の集い（※）」の巻頭言です。

※（R3. 4. 25 社会福祉法人全国重症心身障害児（者）を守る会発行 第747号）

#### 「重症心身障害児・者の輝きに導かれて」 医師 鈴木 康之

私にとって、重症心身障害児・者（重症児者）との出逢いは、人生を教えてくれた天恵でした。学生の頃、「医療の世界に進むなら」と案内されたのが重症児者施設（長崎 みさかえの園）でした。以来、仲間と通い、戸惑いながら、話しかけ、たどたどしく食事介助をお手伝いしました。50年も前のことです。

障害児医療施設に赴任し、子ども達を見つめ、お母様達に教えていただく中で、心に響いたのは、「この子ども普通の子のように」という言葉でした。学校は就学猶予とされ、教育を受けられない時代がありました。障害児医療ですら、“重症児は不治永患”といわれ、区別される時代でした。

でも、子ども達の清く澄んだ瞳、呼びかけに応える笑顔、懸命に生きる姿を見れば明らかです。一人ひとりと同じいのちです。不平等はありえません。海水浴、キャンプ体験など、子どもとして当たり前な生活をし、医療的ケアなど当たりの医療、発達・発育支援が受けられることが目標でした。その出逢いの中から多くのことを教えられました。

すべてのいのちは輝きを持ちます。触れ合い、支え合うことで人はより輝き、幸せが生まれます。人が人間になる、その大切さを、いまも重症児者は教えてくれています。

また、同冊子の中で、「みさかえの園総合発達医療センターむつみの家」施設長：福田雅文氏が記した、鈴木医師の尽力により、国立の重症児病棟に都立養護学校（分教室）が併設された経緯や、併設後の様子について紹介されています。

病棟スタッフと教員が一体となった療育の展開後の初めての夏休みに、休みとは理解できない子どもたちが、学校がないことに大騒ぎしたという。それだけ学校が子どもたちにとってなくてはならないものであることを証明している。

道川分教室は、現在4名（小6：1名、高2：3名）の児童生徒が在籍しています。児童生徒達の日々の笑顔や頑張りに触れる時、子ども達にとって学校は、かけがえのない存在であろうことを実感します。そして、学校にとっても児童生徒達は、多くのことを教えてくれる、かけがえのない存在です。

本分教室は、令和4年度をもって閉室となります。これまでのかけがえのない存在との中で得た、かけがえのない実践等を感謝の気持ちをもって整理し、丁寧に継いでいきたいと考えています。



【あきた病院】

※本ホームページに「分教室のあゆみ」を載せています。併せて御覧いただければ幸いです。